

# 次代に伝えたい「雅の文化」

## 「鶴岡雛物語」と「庄内雛街道」

(財)致道博物館

酒井 賀世



雪が解け、春の優しい光を浴びて、草木が芽吹く季節がやってきた。私は、毎年この頃になると、祖母や母を手伝ってお雛様をお座敷いっぱいに飾り、お友達を招いて遊んだ幼い日の楽しい雛まつりを思い出す。

平安時代、季節の変わり目には神に食物をお供えして人も同じものを頂き、健康や幸福を祈る節供という信仰があった。特に三月の初めの節供(上巳の節句)には紙で作った人形を神様に見立て、お供え物をしてもてなす行事があり、貴族の少女が好んだ人形遊び、ひいな遊び<sup>ひいなあそび</sup>や、人形を枕元に置いて魔よけにした習慣が混ざり合って、江戸時代に現在のようないな雛まつりが誕生したといわれている。そして、いつしかそれは女の子の成長と幸せを祈る行事となった。

戦前まで山形県には古くから子供たちが近隣の家々のお雛様を見て巡る「お雛見」の風習が続いてきた。男の子も女の子もその時に頂いた雛菓子や雛あられも楽しみの一つだったと昔を懐かしむ方が多い。

ここ庄内地方は、江戸時代に湊町酒田から京に紅花を運んだ北前船が戻りに運んできた京雛や奥州・羽州街道で江戸から陸路運ばれてきた江戸雛が数多く残る全国的にもめずらしい地域である。家々では三月半ばを過ぎ、ようやく雪が解け出した頃、お蔵から雛人形運び出すことから春がはじまる。お座敷に雛段を組み、お雛様を飾ることをうれしい行事として、祖母、母、娘と代々大切に受け継ぎ、守り続けてきた。

旧庄内藩主酒井家は、お雛様研究家藤田順子先生との出会いをきっかけに、平成七年三月にそれまでは毎年自宅で飾ってきた雛人形や雛道具を公開することとなった。多くの方に庄内の歴史や文化を身近なものとして楽しんで頂きたいとの願いから、致道博物館で、酒井家のお雛様と雛道具展<sup>ひなごころん</sup>を開催し、これを機に、酒井忠久致道博物館長を実行委員長とする鶴岡雛祭り実行委員会を立ち上げ、鶴岡雛物語<sup>ひなものがたり</sup>が誕生した。年々多くのお客様を迎え、今年は記念すべき十周年を迎えた。現在

は致道博物館・荘内神社・銀座通り商店街・風間家旧宅丙申堂・奥湯野浜温泉龍の湯の五会場で公開展示を行っている。さらに今年は銀座商店街を中心に市内二十五店舗が参加する「鶴岡雛めぐり」がはじまり、城下町のお雛見はますます楽しく盛り上がりを見せている。

致道博物館では、酒井家に代々伝えられてきた雛人形と雛道具を中心に、市内旧家の雛人形を展示している。有職故実<sup>ゆうしやくごじつ</sup>に基づいて作られた有職雛<sup>ゆうしやくひな</sup>と有職稚児雛<sup>ゆうしやくこひな</sup>は、江戸時代後期に京で作られた特注品。その優雅で優しいほほ笑みは見る人すべてを優しく和やかな気持ちにしてくれる。芥子雛はその名の通り芥子粒のように小さく、高さは約三センチ。木と紙と布で作られ、鼻がつんと高く、とても表情豊かで愛らしい。六代忠貞公に熊本藩細川家よりお輿入れされた密姫の雛道具は、黒漆塗りに酒井家の酢漿草紋<sup>さくしょうそうもん</sup>と細川家の九曜紋<sup>くわうようもん</sup>、両家の家紋が金蒔絵<sup>かたばみ</sup>で施されている。金具は銀製、その細工と装飾の見事さには感銘を受ける。鏡台に収められている蒔絵が施された八つの

# Value Sight 「鶴岡雛物語」と「庄内雛街道」



酒井家の有職雛

櫛は、どれも櫛目が異なる。鏡・元結・はさみ・おはくろ箱など女性のお化粧道具が一揃え。香箱・香炉・火道具建と火道具などの香道具をはじめ、お姫様の身の回りの品々はため息がでるほど見事だ。一方、ひときわ注目を集める小さな小さなお道具。田安徳川家からお輿入れされた九代忠徳公の室・脩姫と、十一代忠発公の室・鏡姫の雛道具は江戸の七澤屋製で、黒漆塗りに徳川家の葵紋が金蒔絵で施されている。一番大きい三棚（厨子棚・黒棚・書棚）でさえも高さ十センチあまり、職人の卓越した「技」を感じずにはいられない。道中揃え・お部屋・身だしなみ・御飲食などの雛道具はすべて本物を模して作られている。貝合わせ、三面（双六盤・将棋盤・囲碁盤）、三曲（琴・三弦・胡弓）などのお遊び道具からは、大名家の優雅な日常が偲ばれ、楽しそうな姫たちの笑い声が今にも聞こえてきそうな気がする。

戦後全国初の私立美術館として誕生した酒田市の本間美術館では、開館直後の昭和二十二年より毎年「お雛人形展」を開催している。戦後の厳しい暮らしの中に

あつて、どんなに多くの人々が癒されたのだろうか。門前には出店が出るほどのにぎわいだったという。豪商風間家や鶴岡市の斎藤昌二氏のコレクションが寄贈され、雛人形の変遷や歴史を知る上での貴重な資料として、江戸時代初期から明治時代までのお雛様が展示されている。

平成十二年、それぞれの会場が別々に開催していたお雛様展は、庄内観光コンベンション協会主導のもと、庄内十四市町村の垣根を越えたネットワーク「庄内雛街道」として立ち上げられた。今年も十八カ所でお雛人形が公開され、全国から連日多くのお客様をお迎えした。この画期的な企画も今年には五周年を記念して、酒田市の本間美術館での「京に生まれた雅な雛たち」と、鶴岡市の致道博物館での酒井家とゆかりがある「長岡藩牧野家に伝わる秘蔵の雛たち」の特別展が加わり好評を博した。お雛様に会いに、歴史や風土・文化に会いに、広く各地より庄内に来ていただき、地域の人々とも交流する楽しい行事として定着しつつある。

訪れる旅人を魅了する食文化も忘れてはならない。鶴岡市内の菓子屋の店先には、お雛様にお供えする春の山海の恵みを盛り合わせた雛菓子が並び彩りを添える。伝統的な製法で作られる駄菓子や餛飩工、餛飩りきり菓子も職人たちが代々育んできた「技」である。特に餛飩りきりで作られる鯛や海老などの魚介類に加えられる焼き鱧の切り身は庄内独特ではないかと思う。さまざまな果物などどれもがとても精巧に作られ、愛らしい。雛街道に賛同する料理屋各店では、庄内の春の産物を郷土料理に取り入れたひな膳やひな弁当で

**酒井 賀世（さかい・かよ）**

財団法人致道博物館 学芸員。  
 1972年 酒井家18代酒井忠久の長女として鶴岡市に生まれる。1995年 武蔵野女子大学文学部日本文学科卒業。1997年 立教大学にて学芸員資格を取得後、現職。  
 お問い合わせ先：  
 〒997-0036 山形県鶴岡市家中新町10-18  
 (財)致道博物館  
 TEL 0235-22-1199  
 FAX 0235-22-3531  
<http://www7.ocn.ne.jp/chido/>  
 e-mail: chido@axel.ocn.ne.jp

お迎えする。春の訪れとともに旬を迎える鱧のあんかけ、ふきのとうや山菜も伝統料理のひとつである。お雛様を通して異業種間での交流もはじまった。地域に住む私たちが地元の魅力を学び、認識することが、今後の発展には何よりのパワーとなるだろう。

各家の歴史を伝えること、地域の文化を学ぶこと、おもてなしの心、お行儀やしつけ、行事料理など、多くの人が連携する伝統行事が持つ意義を雛まつりを通じて改めて感じている。

近年、全国各地で雛まつりが行われているのはとてもうれしいことで、山形県はその先駆者といえるだろう。電車・飛行機などの交通手段に加え、高速道路の効果か、各会場に他県ナンバーのバスや自動車が多い。山形自動車道の整備により、山形全域も近くなった。庄内・村山・最上・置賜の四地域が連携し、山形県内各市町村のみんなで活動の輪をつなげていくことを、お雛様は静かにほほ笑んで見守っておられるにちがいない。